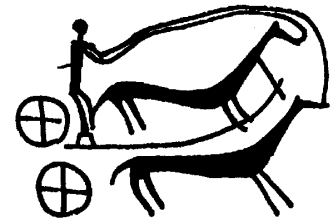


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No. 48



全学教育の科目責任者からひとこと

(3-5ページ)

重要さを増す TA 研修会 (6ページ)

インターンシップのあり方について (11ページ)

AO入試の3つの課題 (12ページ)

平成14年度第2期高校訪問から

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

高等教育の国際的標準化の動き

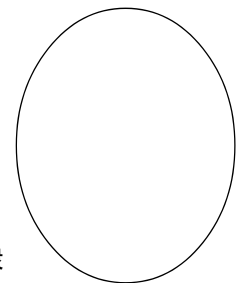
高等教育機能開発総合センター長 佐伯 浩

本年5月から高等教育機能開発総合センター長に就任いたしました。本センターが学内共同教育研究施設として設置されて9年目を迎えたわけであります。前学教育部のほかに、高等教育開発研究部、生涯教育学習計画研究部それに入学者選抜企画研究部の3つの研究部門を有する特徴あるセンターに育っていますし、先日実施された外部評価でも、いくつかの問題点はあるものの、手ごたえのある評価を受けました。

御存知のように、国立大学の法人化に関連する法案が国会を通過し、これからの北海道大学を含む国立大学が新たな道を模索せねばなりませんし、一方、国際的な観点からみると、大学の国際化・標準化と

いった流れを見逃すわけにはいかない状況となっています。

高等教育の発祥地であるヨーロッパの高等教育については、それぞれの国が古い伝統を有していて、大学が大眾化している米国や戦後の我が国の高等教育とは異なっていました。しかし、ECの通貨統合に代表されますように個々の国家の枠を越えて種々の統合が進行しています。教育の面でも、今まで多様な高等教育制度を持ったヨーロッパ諸国において、高等教育の標準化が急速に進み、1999



年、29の国と地域が署名したボローニャ宣言が採択されました。これには、EC域内の国のみならず、将来EC加盟を希望しているポーランド、チェコ、バルト三国などの国々も含まれていて、現在は、各国で、この宣言に基づいた高等教育制度の改革やそれに対応した法律の整備も行われていますし、その進捗状況についても定期的な調査・確認作業が行われていて着実に実施されつつあります。このボローニャ宣言は、ECの教育政策に極めて近い形でまとめられていて、ヨーロッパ圏域における高等教育、特に学位システムと単位制度を中心とした共通の枠組みを構築したもので、今後のヨーロッパ圏域における人の流動化を促進させるとともに、高等教育の面における国際競争力を一段と飛躍させるものと思われます。この宣言の主な柱は、?比較可能な共通で理解し易い学位制度、?学部と大学院の二段階構造、?共通単位制度の導入、?学生、教官の流動化促進、?比較可能な評価基準の構築による学生の質の保障、?

ヨーロッパの特性を考慮したカリキュラム、研究プログラム等の開発、であります。

このようなヨーロッパ圏域における高等教育の大きな変革の渦は、比較的保守的な政策を取っていたドイツの各大学にも、現在大きな改革をもたらしつつあります。

我が国においても、工学教育プログラムについては、認定組織をつくり、米国等が主導するワシントン・アコードに準会員として加盟し、国際的な枠組みに組み込むべく努力されているものの、高等教育政策そのものの国際化については、ヨーロッパ諸国にも遅れをとっている状況を反省する必要があるかもしれません。日本がアジア圏域の高等教育面でのリーダーシップをとるためには、学生、教職員の外国語によるコミュニケーション能力をより高めることと同時に、ドイツ等で実施されているような外国人学生に対する日本語教育施設の整備を早急に取り組みなければならぬと思われます。

<成績評価をめぐって(その4)>

GPA制度導入とUMAPの国際間単位互換方式

獣医学研究科教授 藤田 正一

既にGPA制度については様々なところで紹介されていると思うので細かい重複をさけるが、学業成績を4あるいは5段階に区分して、相対評価し、その評価を数値化して、それぞれの科目の成績点にそれぞれの単位数を掛けたものの総和を、その学期の全履修単位数で除したものが単位当たりの平均成績点(GPA: Grade Point Average)である。従って、「GPA制度」とは、学業成績の相対評価と、評価の数値化とということであろう。多くの大学ではこの制度をP/NP(パス/ノンパス: 合否判定)制度と抱き合わせで使っている。則ち、成績の段階評価に相応しく無い科目はP/NP評価の科目として提供されるし、また、学生が自分はこの科目はGPA評価の対象としてほしく無いが、履修して合格しておきたいと考える科目については、学生が自分でP/NP評価でその科目を選択することを指定できる。当然、P/NP評価で履修した科目の単位数はGPA算出時の分母には加算しない。このような制度は多くの欧米および韓国の大学で一般化しており、大学のレベルとあわせて考えると転入生、留学生の評価をする時等に極めて評価しやすい制度である。

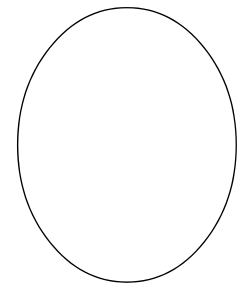
相対評価に基づくGPA制度の導入については種々の論議があったが、本学としてはこれを導入することが既に教務委員会での承認事項となっている。しかし、実施にあたって、この評価システムの導入はもっぱら学内向けと言う条件付きで、かなり消極的な導入と言えよう。転・編入学、学士入学等、国内でも様々な入学形態が可能になりつつある中、このようなシステムは学外との対比の中でこそ、その真価が発揮できる。他大学、あるいは外国の大学で取

得した単位の成績評価には極めて有効に利用できるシステムであり、相手方大学に提供できる派遣学生の情報として優れたものである。国際化時代に対応した英断かと思いきや、なんとも煮え切らない導入法で、私としてはなんのために?と戸惑うばかりである。

さて、アジア太平洋地域の大学間交流、特に学部学生交流・短期留学の推進を目的として設立されたアジア太平洋大学交流機構(UMAP)と言うものの存在を御存じだろうか。ここで、GPA制度が一般的では無いアジア地域での大学間の単位互換について検討がなされ、UMAP単位互換方式(UCTS)というのが参加校の間で導入されている。相対評価方式で、GPA制度を導入していれば簡単な換算でUCTS単位に読み替えることができる。以下にUMAP単位互換方式(UCTS)について紹介したい。

アジア太平洋大学交流機構(UMAP)とは

UMAP(University Mobility in Asia and the Pacific: アジア太平洋大学交流機構)は前述のようにアジア太平洋地域の大学間交流、特に学部学生交流・短期留学の推進を目的として1991年に発足した各国・地域の大学協会を主たるメンバーとするNGO(非政府国際機関)組織である。但し国情によっては国の大学省が国・私立大学を代表する機関として参加している。UMAPの役割としては、留学生の交換及び単位互換等に関する基準の策定、情報の収集・提供、研究・



協議のほか将来的には多角的交流の調整機能を持つ。

UMAPのこれまでの経緯

1991(平成3)年、オーストラリア大学長協会 AVCC が提唱。同協会が香港で日本、韓国、台湾、香港の大学関係者に対し説明。

同年9月、キャンベラで第1回総会(Reference Group Meeting)開催。13か国が出席し作業部会の設置を決議。

1997(平成9)年11月にタイのピサヌロクで作業部会を開催。EU政府から、1999(平成11)年の各国の学年度にUMAP単位互換方式(UCTS)の実験を行う計画について提案があり、承認。

1998(平成10)年8月にタイのバンコクで第6回総会が開催されUMAP憲章が採択されるとともに、東京大学に正式にUMAP国際事務局を設置。

1999(平成11)年秋からUCTSの試行を開始。

2000(平成12)年1月、神戸で開催されたUMAP国際理事会において、我が国からアジア諸国等のリーダー養成を支援する「UMAPリーダーズ・プログラム」の開発を提案。

2001(平成13)年3月、オーストラリアのピーチワースでの第9回総会においてUMAP憲章改正案を承認。

同総会において、我が国からの「UMAP短期留学推進制度信託基金」の創設の提案が承認。

2001 平成13 年5月、UMAP国際事務局が国際研究交流大学村内の日本国際教育協会東京国際交流館プラザ平成1Fに移設。

UMAP単位互換方式(UCTS)とは

アジア太平洋諸国・地域では、多様な教育システムのもとに学年暦や教育課程、単位認定制度などがそれぞれ異なる運用形態で存在しており、画一化は

困難であるが、留学生交流を促進するためには学生の留学中の学修の成果が留学後、母国の大学において適正に認定されることが不可欠である。UMAP単位互換方式 UCTS: UMAP Credit Transfer Scheme はUMAP アジア太平洋大学交流機構 が研究・開発した単位互換の仕組みで、学生が外国の大学で修得した単位を母国の大学において認定するための標準換算スケールと評価基準を定めたものである。かつて(1988~1995年)、EUがエラスムス計画の下に欧州単位互換システム ECTS = European Credit Transfer System の実験を行ったように、UMAPにおいても、参加国の連携・協力の下に1999(平成11)年秋からUCTSの試行を開始しており、5年間にわたって様々なデータや情報を収集し、問題点の解明と解決に努めることになっている。

画一化は困難であるが、留学生交流を促進するためには学生の留学中の学修の成果が留学後、母国の大学において適正に認定されることが不可欠である。

このUCTSは受入教育機関から原籍教育機関への成績評価換算のためだけに使用されるもので、教育機関が独自にもつ単位点尺度および成績評価尺度に取って代わろうとするものではない。UCTSの単位点尺度では学生の1年間の総学習量を60単位点とする。2学期制の場合は1学期間に学ぶ総量は30単位点と言うことになる。UCTS成績評価尺度は、以下のものからなりたっている。

・AからFまでの5段階で、Eが合格の最低成績。
 ・相対評価により分布する成績
 ・それぞれの成績の定義は「EXCELLENT」から「FAIL」まで範囲があり、「SUFFICIENT」を合格の最低成績(E)とする。

- ・AからFまでの5段階で、Eが合格の最低成績。
- ・相対評価により分布する成績
- ・それぞれの成績の定義は「EXCELLENT」から「FAIL」まで範囲があり、「SUFFICIENT」を合格の最低成績(E)とする。

UCTS成績評価尺度

- A (10%) EXCELLENT: 傑出した学業成績で、ごくわずかの誤りがあるのみ。
- B (25%) VERY GOOD: 平均標準を上回るが、誤りがいくつかある。
- C (30%) GOOD: 一般的に良いが、誤りがかなり目

に着く。

D (25%) SATISFACTORY : まずまずの出来だが、相当の欠点が見つけられる。

E (10%) SUFFICIENT : 学修成果は、最低限を満たしたにすぎない。

FX FAIL : 単位を与えるためには、もう少し勉強が必要である。

F FAIL : さらに相当の勉強が必要である。

教育機関が学生を評価するシステムは、国・地域の間だけでなく、国内・域内においても異なる。したがって、大学間交流、特に学部学生交流・短期留学の推進のためには単位互換制度の確立が不可欠であり、修得単位と成績の換算の目的のために共通の尺度を持つことが必要とされる。このために検討されたUCTS尺度は、上記から明らかなように、本質的には相対評価の成績尺度 (nom-referenced grading scale) で、前もって決められた割合に成績評価が割り振られるシステムである。絶対評価の成績も便宜的には読み替えできるが、曖昧さは残る。我が国の文部科学省では平成11年度から短期留学推進制度にUMAP特別枠を設けるなどして、UCTS導入大学を優先的に支援する等、UCTSの試行を積極的に支援している。UCTS活用への道を開くためにも、国際化に対応するためにも、新規に導入するGPA制度を利用可

能とすることは極めて有用と考えられる。

参考：短期留学推進制度等

UMAP国際事務局は、平成13年度より、従来財団法人日本国際教育協会が実施してきた「短期留学推進制度」(受入れ及び公私立大学の学生の派遣)を継承し、UMAP事業として実施するため、日本政府からの拠出金を基に「UMAP短期留学推進制度信託基金」を設立した。本基金については、平成13年3月にオーストラリアのビーチワースで開催された総会において、我が国からこの基金の創設を提案し、承認されたものである。なお、UCTSの試行への積極的な参加と普及を推進するため、UCTSの活用を計画している大学については、優先的に支援することとしている。

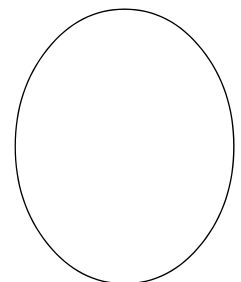
平成12年に神戸で開催されたUMAP国際理事会において、我が国から提案し、承認された「UMAPリーダーズ・プログラム」は、我が国の大学が有する知的資産を活用し、アジア諸国等の将来のリーダーとなる人材の養成を支援し、世界の安定と発展に寄与するために創設された。学部レベルの学生を対象に、夏期の約2ヶ月間、我が国の大学に招聴し、主として英語による集中的な講義等を行い、単位を授与し、授与された単位はUCTSにより在籍大学の単位として認定されるプログラムである。

特別講義「北海道大学の人と学問」 の成績判定について

高等教育機能開発総合センター教授 小笠原 正明

「北海道大学の人と学問」は、1年生を対象とする全学教育科目のなかでももっとも「人気」のある科目です。1998年に部局長会議における発議にもとづいて、「北海道大学に入学したばかりの学生が、本学およびそれぞれの部局の設立の経緯、発展の過程、現状、およびそれぞれの学問分野の概要を知る

ことにより、本学の学生としての自覚を持ち得るようにする」ために、総長以下、各学部長などがほぼ2回つづ担当して開講することになりました。その直後



から、定員500名のセンターの大講堂には収容しきれないほどの受講者が殺到したため、01年度からは週2回の開講となりました。その具体的な教育目標は、シラバスに次のように掲げられています。

本学におけるそれぞれの学問分野のおおよそを理解し、必要に応じてその分野の専門家や文献にアクセスできる能力を養う。講師自身の教育者および研究者としての体験から、それぞれの専門領域の社会的位置づけや将来への展望、さらには人間としての生き方を学ぶことも考えられる。この授業を契機として、学生が学問や社会や人間について問題意識を持つようになることが望ましい。

授業の内容はバラエティーに富んでおり、学生の受講態度も概ね良好で、全学教育を代表する科目の1つに成長しています。問題は成績評価の方法で、これについては、開講直後から議論的になっていました。授業の性格上、全体を通した試験はむずかしく、毎回、あるいは講師の交代の度ごとに、授業の最後の15分程度の時間を利用して感想文(コメント)を書かせるか、担当者によっては小テストを行っています。最終の成績は、このような短い文章の評価を積算して決められます。こういう成績判定法は、講師が頻繁に交代する「複合科目」でよく見られる

ものですが、「感想」を評価することはできない」とか、そこで提出される「答案」そのものに疑問があるのではないかという声がありました。そこで、昨年度、この授業にティーチング・アシスタント(TA)が採用されたのを機会に、次のような改善を試みました。

1) 授業の開始にあたって、評価の方法について詳しい説明を行い成績評価は厳正であることを宣言した。

2) 受講生が入室する際、コメント用紙を一人ひとりに手渡し、適切な方法で用紙の管理を行った。

3) 授業担当者に、コメントまたは小テストの課題を明快に示すこと、また適切な成績評価を行うよう依頼した。

上の2)のコメント用紙の管理についてはTAに一任しましたが、担当したTAのグループはさまざまな工夫をこらしてその責任を果たしました。その詳細は、前号の「センターニュース」の堂河内君のレポートに生き生きと描写されています。

私も学期のはじめの方でオリエンテーションのための授業を行っています。その時に出されるコメントを採点して、評価のむずかしさを実感しています。評価は3, 2, 1の3段階で行い、不可はゼロとす

図1 改善前(2001年度)の「北海道大学の人と学問」のあるクラスの得点分布

ることになっています。文章はA4版の半分程度の長さですが、500名分ともなると読むのに相当時間がかかります。結局、文章を一読して直ちに判断せざるを得ません。判断の基準としては、私の場合、1) コメントに一応の内容があるか、2) 授業の内容を理解しているか、3) 自分の意見を持っているか、を目安にして、順番に3, 2, 1とつけることにしています。このような基準について、授業担当者間で必ずしも合意があるわけではありませんが、多くの文章を通して読んでみると、それなりに根拠のある(相対的な)判定基準ができあがってくるように思います。

このように7名から8名の担当者が評価して得られた数値を合計した結果を図1に示しました。低得点側にだらだらと裾を引いていますが、これは、最初の講義に数回出席して途中で放棄したり、面白そうな授業を選んで出席した学生たちの存在を示すものですので、成績分布を見る上では無視してかまいません。得点合計15点以下を不可として除外すると、25-27点を中心になかなか対称性の良い分布が得られます。1回の判定には曖昧なところがあるかも知れませんが、数を重ねるとそれなりに妥当な評価となるのではないのでしょうか。

ちなみに、一昨年度の得点分布を図2に示しました。評価の回数が違うので、絶対値の比較は意味がありませんが、ピークより高得点側で急降下する形になっています。これは、出席点を重視したときに典型的に見られるパターンで、「楽勝科目」の特徴です。この年度では、受講者には易しすぎる合格基準を設定したことになります。昨年度の改良で、「人と学問」はこのような楽勝科目から「普通」の科目になったと言えます。そのせいかどうか、今年は、週2回開講の授業を合わせて、全体で受講者が2~3百人減りました。これは良いことだと私は考えています。

最後に、図1のような正規分布に近い得点分布になったとしても、どの部分を優とするべきか、どの部分を良または可とするべきか本学には基準が存在しないということを指摘したいと思います。昨年度は、一応全体の26%程度を優にしましたが、こういうときに基準が無いのはまったく困ります。受講生に何と説明したら良いかわかりません。相対評価が可能なきには、一応の目安をぜひ決めて欲しいものだと思います。

(「人と学問」コーディネーター 小笠原 正明)

図2 改善後(2002年度)の「北海道大学の人と学問」のあるクラスの得点分布

全学教育

GENERAL EDUCATION

平成15年度全学教育委員会の検討事項

第49・50回全学教育委員会開催される

4月24日（木）に第49回（平成15年度第1回，6月5日（木）に第50回（同第2回）全学教育委員会が開催され，つぎのような議題について話し合いました。

第49回

- 議題 1. 全学教育委員会小委員会委員の構成
- 議題 2. 学生委員会委員及び学生問題担当委員の選出
- 報告事項 1. 附属図書館北分館委員
- 報告事項 2. クラス担任のオフィスアワー
- 報告事項 3. 北海道大学インターンシップ

議題 1 では，全学教育委員会小委員会委員がつぎのように決まりました。

安藤厚（文学研究科，センター長補佐，委員長），高橋英明（工学研究科，センター長補佐。5月1日より三上隆，工学研究科，センター長補佐に交替），在田一則（理学研究科，センター長補佐），栗生澤猛夫（文学研究科），姉崎洋一（教育学研究科），小野寺彰（理学研究科），前沢政次（医学研究科），森美和子（薬学研究科），宮下雅年（言語文化部）。

報告事項 2 では，今年度も各クラス担任にオフィスアワーを設けていただき，学生に掲示で知らせたことが報告されました。

報告事項 3 では，徳永委員長から，本学におけるインターンシップの在り方について，学生委員会の下に設置された専門委員会の報告が了承され，その中で，全学教育においてもインターンシップ科目の開設を検討するよう要請されているので，今後小委員会で検討することが報告されました。

第50回

- 議題 1. 平成15年度全学教育委員会の検討事項
- 議題 2. 学生委員会インターンシップ専門委員会委員の選出

- 報告事項 1. 履修調整
- 報告事項 2. 平成15年度第1学期の全学教育科目の履修者数
- 報告事項 3. 全学教育におけるOB教官（本学定年年令を超える者）の非常勤講師任用の見直し
- 報告事項 4. 理系基礎科目設定の見直し

議題 1 では，平成15年度全学教育委員会の検討事項（案）について，佐伯委員長，安藤センター長補佐から説明があり，質疑のあと，今後各項目について小委員会で検討することになりました。

平成15年度 全学教育委員会の検討事項

1. 全学教育科目の充実について
 - (1) コアカリキュラムを基にした授業計画
 - (2) 履修調整
 - (3) 学部との連携
 - (4) 履修登録の上限設定の検討
2. 全学教育支援体制の構築について
 - (1) 科目責任者会議の運営
 - (2) 責任部局の「責任コマ数」
3. シラバスの在り方について
 - (1) 内容の充実
 - (2) シラバス検索に関する改善事項
 - (3) 入力作業等の改善事項
 - (4) シラバスのペーパーレス化
4. 全学教育における施設・設備の充実について
 - (1) S講義棟，N1, N2講義室，大講堂への渡り廊下，

S教官棟の整備・充実

(2) 視聴覚機材 (OHP, 資料提示装置等) の整備

5. 履修指導について

(1) 全学教育科目の履修指導

(2) クラス担任による指導

(3) 履修相談, オフィスアワー, クラスアワーの設置

6. 「成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施について」の通知に係わる課題について (2. (1) 科目責任者会議の運営, 3. シラバスの在り方との関係)

(1) 成績評価基準の明示

(2) 成績評価基準の設定

(3) 成績評価結果の公表

(4) 成績評価の妥当性の検討

(5) 学業成績評価の意味について学生への周知徹底

7. 流用定員解消に伴う全学教育について

8. 医学部保健学科設置に伴う全学教育について

9. 全学教育における非常勤講師任用について

10. 理系基礎科目設定の見直しについて

11. 外国語教育について

12. インターンシップについて

13. 高大連携授業について

14. 追試験について

15. TAの在り方について

第2学期の履修調整

報告事項1では, 本年度4月の履修調整の状況, および第2学期には履修調整の方法を次のように変更することが報告されました。

(1) フィールド体験型合宿授業については, 学期はじめの一般教育演習の履修調整・登録とは切り離して, 1月中旬頃に履修申込みを受け付ける。

(2) S2講義室での授業については, 「履修許可票」の配付・回収による調整をやめ, 一般の講義科目と同

じく, 履修届の集計の後での講義室の変更により, 調整がつかない場合は抽選による方式に変更する。

(3) 一般の講義科目について, 教室の変更・調整をスムーズに行うため, 教官による講義室の指定は受け付けないことにする。

(4) 外国語A・B演習, 外国語Cと外国語特別講義の合同授業について, 履修調整の方法が学生に徹底せず, 混乱が見られたので, 言語文化部と協議する。

(5) 国際交流科目との合同授業についても, 履修調整の方法に問題があるので, 留学生課と調整する。

報告事項2では, 平成15年度第1学期の全学教育科目の履修者数が報告され, この資料を来年度の開講計画の検討に活用してほしい旨述べられました。

報告事項3では, 1) 4月25日の教務委員会で, 現在「一般教育演習」に限られているOB教官 (本学定年年令を超える者) の非常勤講師任用を, 非常勤講師の確保に困難が生じている外国語科目, 基礎実験にも認めようとする提案が了承されたので, 細部を小委員会で検討すること, 2) これに関連して, 点検評価委員会が実施している学生への「授業アンケート」について, (1) 全学教育科目担当の非常勤講師についても何年かに一度実施してほしいこと, (2) 全学教育科目担当教官分の「アンケート」の結果を高等教育機能開発総合センター長にも通知してほしいことを, 点検評価委員会に申し入れることが報告されました。

報告事項4では, 委員長から, 教務委員会で, 理系基礎科目 (物理学, 化学, 生物学) に新しい4単位科目を設定することについて, 教育戦略推進WGの提案が了承されたので, 実行案を小委員会で検討することが報告され, 安藤センター長補佐からは, これについてすでに理学部の関係科目責任者に検討を依頼したことが報告されました。

(安藤厚 文学研究科教授・センター長補佐)

高等教育 HIGHER EDUCATION

函館キャンパスで専門教育科目に関するTA研修会を開催

高等教育機能開発総合センターでは、4月14日(月)に函館キャンパスにおいて専門教育科目に関連したTA研修会を実施しました。札幌キャンパスでは、従来、全学教育に関連したTA研修会を主体に実施してきましたが、今回は主に水産科学研究科に所属し、専門教育科目の実験・実習に携わる大学院学生を対象として開催されたものです。函館キャンパスでの開催は、参加者の人数把握に十分な時間が取れなかったにもかかわらず145名が参加し、最後のグループ発表会まで参加して修了者として認められた人数は131名に達しました。参加者が学部関連の学生実験・実習に係わるTAであるところが今回のTA研修会の大きな特徴といえます。TA経験年数別の参加人数は、未経験者72名、1年30名、2年6名、3年8名、4年5名、5年1名、不明6名でした。

当日の研修会プログラムは、札幌キャンパスで開

催された内容にほぼ沿ったものでした(表1)。

今回のグループ討論は当日受付の参加人数が多かったことから、1グループ当たりのTA人数が12~14名となり適正な討論を行うには多過ぎたため、グループリーダーに負担が大きくなったことは反省点といえます。実際に終了後に回収したアンケート調査結果(回収率98%,128名)でも約10%の参加者からも同様の意見が出されていました。しかし、専攻、学年を越えてディスカッションの機会が得られたことからグループ討論と発表会が有益であった点として挙げられていました(回答者の約72%)。グループ討論の内容が実験に関連したケース・スタディーであったことから、自分達が学部学生時代に経験していること、TAとして参加して実際に同様の状況に直面したことから、グループ討論の内容について共通点がありスムーズでしかも真剣な討論が

表1 函館キャンパスでのTA研修会プログラム

日時：平成15年4月14日(月)
会場：水産学部 大講義室
主催：高等教育機能開発総合センター

<プログラム>

9:15 受付
9:30 挨拶 水産科学研究科長 山内皓平
9:35 ミニ講義「大学教育の基礎について」 西森敏之
9:50 講演「Teaching Assistant」 小笠原正明
10:10 講演「実験指導とTAの役割」 細川敏幸
10:30 休憩(10分間)
10:40 「グループ学習とアイスブレ-キング」 細川敏幸
11:00 グループ討論
10グループに分かれて討論
12:00 - 13:00 昼休み
13:00 グループ討論の発表会
14:00 質疑応答、アンケート調査
14:30 終了挨拶

行われました。また、今回のプログラム内容が、実験・実習を想定した内容ではありましたが、もう少し自分達が関連する学部の実験・実習に沿ったものにして欲しいという要望のあったことは、他の部局においてもそれぞれ固有の問題を取上げて開催することが有意義であることを示しています。

午前中の講義については約10%の参加者からためになったという記載意見があり、さらに、資料集(高等教育開発研究部編集)が良く出来ているという意見もありました。内容面では、研修中にも質疑のあった点ですが、TAがどこまで権限があるのかについて、もっと知りたかったこと(5名)が要望としてだされていました。他には、教官の参加を望む意見と教官に対しても同様の研修を実施してほしいという意見を合わせると15%に達したことは、任用側として大学院教育の一貫でもあるという共通の認識を持つことの重要性を喚起させるものです。そして、今回のようなTA研修会の開催には積極的な意見が多く見られ、しかも実験・実習の指導に当たる教官と一緒にTAの在り方について考えたいとの希望も見られました。

以下に示す回収アンケートの具体的な内容は、今後継続的に実施していく上で参考になるものです。

参加者の意見から - アンケート回答 -

5. 本日のプログラムの中でもっとも有益だったのはどれですか?

グループ発表と研究発表

- ・色んな意見を聞いて良かった。先生の意見よりも身にしました。
- ・自分で考えるプログラムだから。
- ・必ず生じうる問題ばかりで、この4月からはじめてTAをやる自分にとっては、前もって気持ちを整理し、心構えが出来ました。
- ・他人の意見を聞くことによって、考えが広がり刺激された。
- ・先生からの講義だけでなく自分達が考え、意見を交わせたのはよかった。発表も班ごとに個性があっただけよかった。
- ・自分達から進んで研修に関われたから。最初は気が進まなかったけれど、今では良かったと思っています。
- ・実際に手順を踏んで問題解決を試みるのは、他の場面にも応用できそうだから。
- ・TAが職務する意義がわかったので良かったと思います。
- ・普段他人の意見をあまり聞く事がなかったので、自分と違う意見が聞いてよかったと思う。
- ・学生実験を進めていく上で、自分もTAとして様々な問題意識をもって臨まなければならないということを考えさせられました。
- ・TAをした経験のある方の意見を聞いた。
- ・TAが直面する様々な問題の実例や具体例を教えて

もらって、その解決策を説明してもらえたから、ありがたかった。

講演「実験指導とTAの役割」

- ・TAの権限について。TAはどこまでやれるのかに興味があったため。
- ・TAの立場の定義がわかった。但し、詳しい文書説明があればそれで十分とも感じた。
- ・実例などが提示されていて1番わかりやすかったから。
- ・これまで漠然としていたTAの立場がはっきりしたと思われたため。

午前中の講演

- ・TAとは何かという事が十分に理解することができたため。
- ・午前中の講義全て。初めて聞く話ばかりだったから。
- ・TAがどういう立場であるかを考える機会になったため。

6. 本日のプログラム以外で次年度以降この研修会に取り入れたほうが良いと考えるものがあればお教えください。

TA経験者の話

- ・これまでのTAの失敗談または成功談を聞いてみた

かった。もと学生のTAに対する意見(アンケート等)も聞いてみたかった。

- ・TA経験者による、未経験者へのアドバイス、話など。
- ・実際に何年もTA経験のある、博士課程の先輩の話を知ることがよかったです。

教官の参加と教官に対する研修会

- ・教官と共に参加できたらなお良いのでは……。
- ・水産学部の教官による研修会の開催。
- ・先生の研修を僕らの前でやっていただきたい。包み隠さず、なるべくオープンにした方が、何かと先生とTAの間にカベがなくなるのではないかと。
- ・TAの役割だけでなく、TAがどこまで手を出して良いのかについても話して欲しい。
- ・教師の研修会の実施。
- ・教官も参加したほうがいい。教官として講義や実験指導者として適していない方もいるので(TAの方が上の場合もある)。
- ・教官に対しても同様の講習会を行い、認識を共通のものにしていくと良いと思う。
- ・教官に対しても同レベルで充分なので研修会を開くべき。
- ・学生たちの意見や教官の意見(予めアンケートをとった意見等)。

TAの権限について

- ・TAの権限について明確にして欲しい。
- ・教官側のTAに対する要望,期待と言うものが,どの程度なのか? また,具体的にどういうものか?と
いうことを聞いてみたい。
- ・TAの権限なども,もっと分かりやすくすると,TA
としての意識が高まるので良かったと思います。
- ・自分の所属以外の話なども聞くと,やはり講座に
よってTAの負担,役割などがとても様々で,幅広い
事が感じられるが,その事はもう少し教官も認識し
て,ある程度のTAの仕事の範囲は設定するべきだ
と思う。
- ・対処法(実例に対する)の意見が全て抽象的で分
かりにくかった。やはり,実際にTAとしてどのへん
まで関与していいものか上に立つ教授側(先生側)
で意見を出すべきであると思います。
- ・本質的なところ(TAの役割をどこまでとするか?)
は突いていないと思う。せっかくの機会なのでも
っと踏み込んだ話に重点をおいては?
- ・私の研究室だけではないと思うが,TAが成績を評
価する事は皆無に等しいように思う。

7. 本日のプログラムを良くするためのアイデアが
ありましたら記入して下さい。

教官の参加と教官に対する研修会

- ・生徒が受ける義務があるなら,教師も受けるべき
だと思った。

- ・学生実験を担当する教官も参加した方が,より良
いアイデアが出ると思いました。
- ・教官に対してもTAの扱いについて説明するべき
- ・水産学部で実際に学生実験を受け持っている先生
方の意見を聞けたら,と思いました。
- ・教授陣も出席して,意見を述べて欲しいです。
- ・最低限,教官同士で同レベルの意識(実験等に対
する&TAに対する)を持たせる必要があると思う。
- ・今日の研修会でも話があったが,教官の参加も必
要なのではないかと思う。
- ・今回はTAを中心としたTAの意見でしたが,教官
をとり入れたり,学生を入れればそれぞれの意見や
立場の話が聞けると思います。

グループ討論の人数

- ・専攻・講座別など,少人数でやってほしい。そし
てグループ討論に先生方も入って,もっと質問など
しやすくしてほしい。
- ・討論の人数を減らして,活発な議論がなされるべ
きと考えます。
- ・ディスカッショングループの人数を小さくするこ
とで,さらに活発な意見交換ができるのではないか
と思いました。

その他

- ・TAの自覚をもっと高めることができるような,実
際のTAの事例などを紹介できるともっと良くなる

と思います。

- ・ディスカッション用のケース・スタディーのテーマをもっと練るべき。そうしないと、短絡的な結論や抽象的な結論になると思う。

- ・1グループ毎に討論テーマを与えた方が良いと思います。

- ・ケース・スタディーの内容を学部ごとの内容に(例えば水産学部っぽく)するとよりわかりやすい発表になったと思います。

- ・先ず、「水産学部」であることを理解した上でプログラムを編成すべき。

8. その他, コメントがありましたらお書きください。

教官の参加と教官に対する研修会

- ・教官が教育者としての自覚を持ち,TAをする学生の見本となるような振る舞いをしてほしい。TAが雑用係となるのでは意味がないと思う。教員と学生との差を埋める意味でも手本となるような教官の成長を望んでいます。

- ・先生に対しても同様の研修を受けてもらいたい。教え方が上手な先生ばかりではないのでこういう機会を設けて再び教育を考え直してもらいたい。

- ・TAの研修会をやるのなら,教官の研修会も行うべきだ。

- ・TAに対する要望など,先生側のTAに対する意見をもっと聞きたい。

TA研修会に参加して

- ・今回このような研修会に参加して,いろんな講座

の人と話し合ったり,話を聞く場をもてたことは良かったと思う。TA経験がないので参考になった。今後の課題にしたい。

- ・今年からはじめてTAを受ける際に,講義やグループディスカッションの具体例を聞いて,これからの生徒に対する対処の仕方の参考になることが多かったので,これからは役に立てたい。

- ・去年,TAをした時には,特に何も意識しておらず,適当にやっちゃってしまっていたように今は思います。今年はTAの存在意義を考えたことで,より真剣に行う事ができそうです。

- ・今回のような研修は水産科学研究科では初めての事でしたが,大変有意義で,単にTAのためという以上に普段の研究室での生活でも参考になると思いました。

- ・教える立場,実験の際の環境作りを再認識できた。今日の討論や発表にあった内容を参考に,TAとしての役割を果たしていきたいと思う。

- ・とても有意義な時間で,TAに対する心構えができた。

- ・もっと早くからこういった会を開いて欲しかったと思う。

- ・今回が最初で最後となりましたが,いい場だったと思います。今後も続けて有益な場に発展するよう願っています。お疲れ様でした。

無意味である

- ・全て当然の事ばかりで参考にならなかった。研修会の必要性を再検討してほしい。

(猪上 徳雄)

ギルモア博士が客員教授に着任

客員教授として、ギルモア博士が5月初めに着任されました。任期は3ヶ月です。ジェラルド・ギルモア博士は、1970年に米国ミシガン州立大学より心理学博士を授与されました。イリノイ大学で3年間教職に就いた後、ワシントン州シアトルにあるワシントン大学の教育評価室の副室長となりました。1980年からは室長になるとともに心理学講座の助教も兼任しました。2001年にいったん職を退き、ローマ（イタリア）とマストリヒト（オランダ）での研究生生活を経て、2002年からは教育評価室の名誉室長ならびに上級研究員を勤めています。

ギルモア博士の専門領域は、教育測定、心理測定、

学生の成績評価、教育評価です。彼はワシントン大学での在職中、大学内のアセスメントの実施の調整を担当しました。また、ワシントン州で使われている数学のプレースメントテストの仕組みを発展させました。このシステムは、卒業生を調査し、教育の質も評価するもので、毎年12000にのぼるワシントン大学の教科でも使われています。さらに、このシステムは米国の50を超える大学でも使われています。彼はこの他にも多くの専門領域の論文を発表しております。詳しくは以下のアドレスをご覧ください。

<http://www.washington.edu/oea/ggillmoreresume.htm>

写真 講演するギルモア博士

大学教育の評価について 米国の経験から

今年度の高等教育機能開発総合センター客員教授のギルモア博士による講演会が去る2003年6月13日（金曜）に情報教育館4階の共用多目的教室（1）で開催されました。

ギルモア博士はまず、"evaluation"（評価）、"assessment"（アセスメント）、"accountability"（説

明責任）について独自の概念的な区別について説明しました。"evaluation"は一般的な意味の「価値を判断すること」。アセスメントは、教育組織の内部者が中心となり、その組織が重要であると考えている学習成果の到達度に注目する評価モデル。カウンタビリティは、外部の顧客や関係者の価値付けに注目

する評価モデルだそうです。

米国では、1980年代に入り学生が授業を通じて何を身につけ、何ができるようになったのを実証的なデータによって示すことが強く求められるようになりました。ワシントン州高等教育計画委員会も1987年に、州内の高等教育機関に在籍する学生は、大学2年次修了時に、コミュニケーション能力、計算力、批判的思考能力を測定するための標準テストの受験を義務付けることを決定しました。この決定に対し、ギルモア博士を中心とする研究グループは、2年間にわたる実証的研究の結果に基づき、提案された標準テストは教養教育の効果を測定するための妥当性に欠けると反証し、州政府の決定を覆しました。その結果、教養教育の評価に対して州政府は、大学間の違い（規模や教育理念など）や教員がアセスメントに深くかかわることの重要性を認め、説明責任アプローチよりアセスメントアプローチに近い考え方になったそうです。

ギルモア博士は、教養教育の教育効果は知識ではなく、知識を応用できる力や批判的思考力などのスキルに注目すべきであることを強調しています。より妥当性の高い測度を探る研究の一環として、4年次修了時におけるレポート(the Senior Writing Study)に関する研究を行なっています。分野ごとに複数の大学の教員、ライティングの専門家、地域住民が集まり、各学生が「一番よい」と思って提出したレポートを丁寧に読み、評価し、議論したそうです。この研究は小規模なものでしたが、評価の目標設定や学習成果の測度の選択に教員が深くかかわらなければ妥当性が損なわれること、学習成果はクラスのレベルから大学全体のレベルのそれぞれで問われてなければ、教育改善に役立つ評価はできないことが確認されたそうです。質疑応答では、教養教育の効果の測定方法や研究デザインをはじめ、米国の大学のライティング・センターのあり方など活発な討論が行なわれました。

大学生の心のケア 新任教官研修会行われる

6月5日（木）に、情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室において平成15年度の新任教官研修会が行われました。プログラムは表2の通りです。対象

者143名のうち105名が参加しました。最後のグループ討論まで参加したのは47名でした。

午前の部では、井上副学長の挨拶ののち小笠原高

等教育開発研究部長が、札幌農学校1期生で札幌農学校校長、東北帝国大学農科大学長、北海道帝国大学長を歴任した佐藤昌介(1856-1939)の生涯を通して、北海道大学の歴史を紹介しました。次に、常本照樹総長補佐が法人化に関わるさまざまな問題について講演しました。引き続き、長津博経理部主計課長補佐が科研費などの会計事務について説明しました。

パネル討論では、まず安藤厚全学教育委員会小委員長が「修学指導」について全学教育に関する学生の要望とそれに対する教官側からの回答を紹介する形で話題提供をしました(「学生生活実態調査報告書2002年版」参照)。次に道幸哲也法学研究科教授が「セクハラの問題」について話し、北海道大学にはセクシャルハラスメント防止等対策室があり相談員の制度があることを紹介しました。最後に寺沢浩一医学研究科教授が「双方向的授業」をめぐって、双方向の必要性、双方向の具体例、双方向の難

しさについて一般教育演習や法医学の授業などでの体験に基づいて話しました。

午後の部では、小林理子保健管理センター講師が、精神衛生相談室を訪れる学生の数が近年増加していること、大学生がどのようにして心を病むのか、大学生が心を病まないようにするには何ができるのかということについて話し、日頃からの人間関係の重要性を指摘し、いざという場合に学内外で利用できる施設の紹介をしました。

次に、グループに分かれての討論し、全体で討論結果の発表を行いました。今年は、

テーマ1:「女子学生を含む教室の学生とコンパに行った。起こりうる問題を想定し、具体的な対応の仕方を検討してください」

テーマ2:「卒業研究を始める時期に急に学生が大学に来なくなった。具体的な対応の仕方を検討してください」

テーマ3:「優秀でまじめであるが、期日通りレ

表2 新任教官研修会プログラム

日時: 2003年6月5日(木) 午前9時30分~午後3時15分		会場: 情報教育館3F スタジオ型多目的中講義室	
<プログラム>		司会: 細川敏幸 (高等教育機能開発総合センター助教授)	
9:15	受付開始	パネラリスト:	
-----		安藤 厚(全学教育委員会小委員長, 文学研究科教授)	
9:30	挨拶 井上芳郎(副学長, 医学研究科教授)	道幸哲也(セクシャルハラスメント, 法学研究科教授)	
9:35	ミニ講義 「北海道大学はどのようにしてできたか」 小笠原正明 (高等教育機能開発総合センター教授)	寺沢浩一(医学研究科教授)	
10:05	講演 「法人化問題の現状と法人化後の大学教員の権利と義務」 常本照樹(総長補佐, 法学研究科教授)	12:15~13:15 昼休み	
10:45	コメント 「会計事務について」 三好正務(経理部, 主計課長)	-----	
11:00	休憩	13:15 ミニ講義 「大学生の心のケアについて」 小林理子(保健管理センター講師)	
-----		13:35 グループ討論: セクシャルハラスメントと心のケア (グループに分かれて討論)	
11:15	パネル討論 「大学生の指導をめぐって」	14:35 総合討論 司会: 西森敏之 (高等教育機能開発総合センター教授)	
-----		-----	

ポートを出さない学生がいる。どのように対処すべきか考えてください」

テーマ4：「レポートを書かせればよく書くが、決して発言しないクラスがある。どのように対処すべきか考えてください」

の4つの課題について2グループずつ計8グループが討論した。一例としてテーマ1を取り上げると、1つのグループは起こりうる問題を分析した後、(1) アルコールをめぐる問題(一気のみ、泥酔他)、(2) 暴力行為、(3) セクシャルハラスメントを取り上げて、対応策を検討しました。もう一つ

のグループは、(1) 飲み過ぎた女子学生にどう対応するか、(2) 新歓などでの未成年の飲酒、(3) 酔った勢いで女子学生にさわる、カラオケの強要などについて討論しました。

アンケートでは午前中の講演、パネル討論や午後の講演に身近な問題として受け止めてさまざまな反応がありましたが、毎年のように、「他分野の教官とのコミュニケーションが刺激になった」など、グループ討論とその後の総合討論がよかったという感想が多くありました。

写真2 井上副学長の挨拶

生涯学習

LIFELONG LEARNING

インターンシップ参加学生向け講習会の開催

北海道地域インターンシップ推進協議会(道内17大学で構成、本学が事務局)は北海道経済産業局、財団法人北海道地域総合振興機構(はまなす財団)と共催で、今年度のインターンシップ参加学生を対象とした「インターンシップ講習会」を開催します。この講習会は、今年度インターンシップに参加する学生やインターンシップに関心のある学生を対象に、インターンシップに対する理解を深め、参加による

効果を一層高めることを目的に開催するものです。

日時：平成15年7月10日(木)16:00～18:30

場所：北海道大学クラーク会館講堂

内容：

講演

テーマ1：「インターンシップ参加に当たっての心構え」

北海道大学高等教育機能開発総合センター生涯学習
 計画研究部助教授 亀野 淳氏
 テーマ2 : 「インターンシップマナー講座」
 有限会社プロ・アシスト講師 後藤 真澄氏
 事例発表

平成14年度インターンシップ参加学生(3名)
 問合せ先
 財団法人北海道地域総合振興機構(はまなす財団)
 TEL 011-205-5011

北海道大学公開講座 「知と技の美 最先端研究に秘められた魅力」

今年度の北海道大学公開講座が、「知と技の美 -
 最先端研究に秘められた魅力 -」をテーマに7月3
 日から31日の毎週月・木曜日の午後6時半から8時

半, 8回にわたって情報教育館を会場に開催されま
 す。この講座は, 学問研究の魅力, 面白さを「美し
 さ」ととらえて, 最先端研究の「美しさ」について

表3 講義日程

< 第1回 7月3日(木) > 歯の健康美	歯学研究科 教授 大畑 昇
< 第2回 7月7日(月) > 宇宙の美と宇宙物理学	理学研究科 助教授 羽部 朝男
< 第3回 7月10日(木) > 野ねずみとどんぐりの不思議な関係	北方生物圏フィールド科学センター 助教授 齊藤 隆
< 第4回 7月14日(月) > 海洋生物に学ぶ未来の船	水産科学研究科 教授 芳村 康男
< 第5回 7月17日(木) > 都市ローマの美と意識	言語文化部 教授 古賀 弘人
< 第6回 7月24日(木) > 鏡の中の化学	触媒化学研究センター 教授 大谷 文章
< 第7回 7月28日(月) > 都市の美しさと品格	工学研究科 教授 越澤 明
< 第8回 7月31日(木) > アートのサイエンス	文学研究科 助教授 石原 次郎

各回とも, 午後6時30分から午後8時30分まで(講義時間90分, 質疑応答30分)

それぞれの領域からわかりやすく講義を行なうことを目的としており、受講生の募集が6月末から始まりました。今年度の講座も北海道大学が現在どのような教育・研究をすすめているかを理解する機会と

なるように構成されており、昨年に引き続き、高校生に聴講の機会を提供する実験的取組を行うことにし、既にのべ160名の申し込みがあります。公開講座のプログラムは下記のとおりです。

入学者選抜

ADMISSION SYSTEMS

新しい高大連携： 新入生オリエンテーションに参加する

研究部では、高大連携の新しい形態を模索しています。高等学校の年間カリキュラムの中にきちんと位置づけながら、高校生を育てる視点がこれからの高大連携に必要なではないかと考えています。

本年、4月24日から26日にかけて、学習指導や進路指導に焦点を当てた旭川北高等学校の新入生オリエンテーションが、国立大雪青年の家で行われました。今年初めて、北海道大学が招かれ、自己実現に向けての講演を担当しました。北海道大学のコア・カリキュラムの構成や、全学教育の内容、また一般

教育演習の授業風景のビデオを交えて大学での学びについて話をしました。また自己実現に向けて大切な夢を持つことの意味についても、高校生に実例を交えて話をしました。

高校生の反応が大変良いことには驚きました。また、学年団の進路指導に対する意気込みも強く感じ取ることができました。今後、より教育内容の文脈に沿った支援ができるように高大連携の新しい形態について研究を進める予定です。

センター日誌

CENTER EVENTS, Apr. - May.

4月

- | | | | |
|-----|--------------------------|-----|---|
| 4日 | ・ (行事) TA研修会 | 13日 | ・ (会議) 第82回センター教官会議 |
| 7日 | ・ (行事) 新入生オリエンテーション | | ・ (会議) 平成15年度第2回センター長連絡会 |
| 8日 | ・ (行事) 入学式 | | ・ (行事) キャンパスツアー (北大交流プラザ「エルムの森」オープンセレモニー) |
| 9日 | ・ (行事) 学部ガイダンス | 15日 | ・ (訪問) 香川県立高松西高校来学 |
| 10日 | ・ 第1学期授業開始 | 16日 | ・ (訪問) 余市町立西中学校来学 |
| 15日 | ・ (会議) 第81回センター教官会議 | 20日 | ・ (訪問) 滝川高校来学 |
| | ・ (会議) 平成15年度第1回センター長連絡会 | | ・ (行事) 模擬講義 (函館東高校) |
| 24日 | ・ (会議) 第49回全学教育委員会 | 21日 | ・ (訪問) 中標津町立計根別中学校来学 |
| | ・ (行事) 北大説明会 (旭川北高校) | 22日 | ・ (会議) 第101回全学教育委員会小委員会 |
| 25日 | ・ (会議) 第25回教務委員会 | | ・ (訪問) 別海町立西春別中学校来学 |
| | ・ センターニュース第47号発行 | 24日 | ・ (訪問) 札幌西高校来学 |

5月

- | | | | |
|-----|------------------------|-----|----------------------------|
| 12日 | ・ (会議) 第26回生涯学習計画研究委員会 | 27日 | ・ (会議) 第8回教育システム弾力化検討専門委員会 |
| | ・ (訪問) 旭川北高校来学 | | ・ (訪問) 岐阜県立多治見高校来学 |

行事予定

SCHEDULE, July - December

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
7月	23(水) ~ 25(金)	補講日	
	28(月)	第1学期授業終了	
	29(火) ~ 8月8(金)	定期試験	
8月	11(月) ~ 13(水)	追試験	
	11(月) ~ 9月30(火)	夏季休業日	
	26(火) 正午	定期試験及び追試験成績提出締切	
9月	中旬 ~ 下旬	進級判定及び学科等分属手続	当該学部
	24(水) ~ 26(金)	集中講義期間	
10月	1(水)	第2学期授業開始	
	9(木) ~ 10(金)	1年次履修届受付	
		2年次以上履修届受付	当該学部
	10(金)	追加認定試験成績締切	
11月			
12月		【24(水)に月曜日の授業を実施】	
	25(木) ~ 1月7(水)	冬季休業日	

センターニュース 2003, No. 48 目次

<p>巻頭言 佐伯 浩 1</p> <p>特集：成績評価をめぐって（その4） 3</p> <p style="padding-left: 20px;">GPA制度導入とUMAPの国際間単位互換方式 藤田 正一 3</p> <p style="padding-left: 20px;">特別講義「北海道大学の人と学問」の 成績判定について 小笠原正明 5</p> <p>平成15年度全学教育委員会の検討事項 第49・50回全学教育委員会開催される 8</p> <p>函館キャンパスで 専門教育科目に関するTA研修会を開催 10</p> <p>ギルモア博士が客員教授に着任 15</p> <p>大学教育の評価について 米国の経験から 15</p>	<p>北大学生の心のケア 新任教官研修会行われる 16</p> <p>インターンシップ 参加学生向け講習会の開催 18</p> <p>北海道大学公開講座 「知と技の美 最先端研究 に秘められた魅力」 19</p> <p>新しい高大連携： 新入生オリエンテーションに参加する 20</p> <p>センター日誌・行事予定 21</p> <p>目次・編集後記 22</p>
--	--

編集後記

6月のはじめに毎年恒例の大学祭が行われた。日曜日に2人の子供を連れてキャンパスを歩き回った。多くの学生の若々しい活気が満ち溢れており、普段のキャンパスとは異なる趣であった。ただ、その後、札幌の中心部を歩いてみると、街はきれいだが、なぜか先ほどのようなほとぼし熱気が感じられない。若者も含めて。このギャップは何なんだろう？ 街にも大学にも同じ若者がいるはずだ。彼らは“場”によって態度を変えているのか？ もしそうなら、大学と街とでは大きなギャップが存在する“場”なのだろうか？ 街は今の時代の閉塞感を表現しており、大学はそうした中での彼らのオアシスなのだろうか？
(かめ)

センターニュース 第48号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2003年6月25日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111・FAX (011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・安藤厚・山岸みどり・鈴木誠・

池田文人・亀野淳

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネットホームページ：http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center